

東日本大震災と宮沢賢治

〈順違二面〉の自然観・人間観

2011 Tohoku Earthquake and Kenji Miyazawa: His Perspective on 'Both Side' of Nature

西郷 竹彦

SAIGO, Takehiko

海は農らの命

このたびの3.11 東日本大震災において、かつてない激震につづく巨大な津波により沿岸の町や村々は壊滅し、多くのかけがえのない人命が奪われた。

荒廃した廃墟の跡に立つ、一人の老漁夫の姿がテレビで放映された。彼の漁船は丘に打ち上げられ、漁具・漁網もすべて流され、彼は、海によって生きる術のすべてを失ったのであった。しかし、恨み言一つ吐くどころか、今は平穏そのものの海に向かって、低く呟く言葉に私はうたれた。「海は農らの命じゃから。」

この老漁夫の態度は、彼一人だけのものではない。過去の地震と津波に際しても、海底から打ち上げられた巨石を、漁師達は、魚介類同様、龍神（海の神）の「贈り物」として、注連縄を張り祀るのである。

歌集『悲しみの海』（「東日本大震災詩歌集」富山房、2012）の編者、歌人谷川健一は序文に、記している。「東北の三陸海岸の、家も船も流された漁師が、連日海辺に立ち尽くし、一日も早く漁が再開されるのを待ち望んでいる姿がテレビに映し出される時、彼らにとって、自分の同胞の命を奪った海は、自分の生き甲斐を支える有情の海でもある。私もまた漁師の背後に立って、有情と非情の矛盾した心境

を交錯させながら、海をみつめる。」

宗教学者山折哲夫は、被災地を訪れた感想を次のように語っている。「そのとき思ったんです。日本列島の自然は、極端な二面性を持っている。恐るべき破壊力を持っている自然という顔と、人間の心を懐深く包み込んでくれる美しい自然という顔、人間の脅威になる一方で、凧いで静まっていると限りなく美しい。二つの素顔を持っている自然と我々の先祖は、何千年とつき合って、生き抜いてきたんです。」「この自然の過酷な二面性とつき合い続けてきた人間が、ほかならぬ我々の先祖なんです。」（宮川匡司編『震災後のことば』日本経済新聞出版社 2012：4）。

被災地の漁民達の津波に対する態度といい、「有情と非情」（谷川）といい、「極端な二面性」、「二つの素顔」（山折）という、すべては、古来からの日本人の自然観であり、それは、実は、岩手県出身の詩人宮沢賢治の自然観でもあった。

宮沢賢治の〈順違二面〉

賢治は、明治29（1896）年の三陸大津波の年に生まれ、昭和8（1933）年の三陸大津波の年に死んでいる。賢治の三十七年の生涯は、地震、津波だけではなく、東北の大凶作、干魃、冷害、飢饉に、た

びたび見舞われている。賢治の多くの童話に、自然というものの、「二つの素顔」（山折哲夫）が劇的に描かれているが、そこには農芸化学者としての賢治と、法華経の信奉者としての賢治という、二つの側面が、劇的に表現されていると言えよう。

賢治の信奉した法華経の神髄「諸法実相」（この世のすべて、つまり森羅万象「諸法」は、いずれも真実の相「実相」である）の世界観に拠れば、漁師の命を育てる海も、漁師の命を奪う海も、その「いずれの相も真実の相」である。ものごとを「二者択一的」に考える「二元論的世界観」（「一神教的世界観」）とは、相容れない。法華経の信奉者である賢治は、そのことを〈順違二面〉という言葉で表現している（注・賢治の文の引用は〈 〉に入れる）。

賢治のいう、〈順違二面〉とは、自然は人間に順う面と、違う面との相反する二面を持っている。肝心なことは、そのいずれが自然の真実の姿であるかという二者択一的自然観ではなく、相依（仏教哲学の用語「そうえ」と読む。量子物理学の「相補」と言うことである）的自然観（それは人間観でもある）を、先ほどの三陸の漁師たちは、父祖伝来の長年の漁師としての経験にもとづき、心底から納得しているのであろう。自然は「人間に順う面」と「人間に違う面」と、相反する「二面」をもつ。いずれを「真」とするわけにはいかない。いずれもが「真」である。この賢治の〈順違二面〉の思想をもっとも典型的に具現した童話の一つとして「水仙月の四日」を紹介しよう。

童話「水仙月の四日」の、自然観・人間観

小・中学校国語教育の文藝教材としても知られる童話である。しかしこれまで、この短い童話が賢治の〈順違二面〉という思想を、具現したものとして

扱われたことはない。そもそも〈順違二面〉という言葉自体、賢治研究の歴史の中でまったく問題にされてきていないという経緯がある（このことについて述べた論文を寡聞にして私は知らない）。実は、この童話は、きわめて説得的な形で賢治の〈順違二面〉の思想を、見事に、感動的に具現している作品である。まず、この童話をかいつまんで紹介する。厳冬の盛岡と思われる地方の物語である。

一人の子供（男の子）を除いて、すべての自然現象が擬人化されている。冬季、シベリヤから張り出してくる寒気団（高気圧）は〈雪婆んご〉（ゆきばんご）、その指揮下（影響下）にある局地気象の人物化は〈雪童子〉（ゆきわらす）、吹きあれる吹雪は〈雪狼〉（ゆきおいの）として登場する。雪婆んごに「今日は水仙月の四日だ。ひとの命の一つや二つとってしまえ」と叱咤され、雪童子は雪狼どもを追い立て、子供に吹雪を吹き付ける。子供は吹き倒されても吹き倒されても、必死で立ち上がり歩き出そうとする。この劇的場面を引用しよう（『宮沢賢治全集』筑摩書房）。

峠の雪の中に、赤い毛布をかぶつたさっきの子が、風にかこまれて、もう足を雪から抜けなくなってよろよろ倒れ、雪に手をついて、起きあがらうとして泣いてゐたのです。

「毛布をかぶつて、うつ向けになつておいで。毛布をかぶつて、うつむけになつておいで。ひゆう。」雪童子は走りながら叫びました。けれどもそれは子どもにはただ風の声ときこえ、そのかたちは眼に見えなかつたのです。

「うつむけに倒れておいで。ひゆう。動いちゃいけない。ぢきやむからけつと⁽¹⁾をかぶつて倒れておいで。」雪わらすはかけ戻りながら又叫び

ました。子どもはやつぱり起きあがらうとしてもがいてみました。

「倒れておいで。ひゆう、だまつてうつむけに倒れておいで。今日はそんなに寒くないんだから凍やしない。」

雪童子は、も一ど走り抜けながら叫びました。子どもは口をびくびくまげて泣きながらまた起きあがらうとしました。

「倒れてゐるんだよ。だめだねえ。」雪童子は向かふからわざとひどくつきあたつて子どもを倒しました。

「ひゆう、もつとしっかりやつておくれ。なまけちやいけない。さあ、ひゆう。」

雪婆んごがやつてきました。その裂けたやうに紫な口も尖つた歯もぼんやり見えました。

「おや、おかしな子があるね。さうさう、こつちえとつておしまひ。水仙月の四日だもの、一人や二人とつたつていゝんだよ。」

「ええ、さうです。さあ、死んでしまへ。」雪童子はわざとひどくぶつかりながらまたそつと云ひました。

「倒れているんだよ。動いちやいけない。動いちやいけないつたら。」

雪童子は、立ち上がろうとする子供を突き倒す。子供は自然の声を解せず、歩き続け、ついに力尽きて、起きあがれない。雪童子は笑いながら、子供の上に赤い毛布を掛けてつつむ。

やがて、静かな夜明けが近づき、朝日が射す。物語最後の一節である。

雪童子は走つて、あの昨日の子供の埋まつてるところへ行きました。

「さあ、ここらの雪をちらしておくれ。」

雪狼どもは、たちまち後足で、そこらの雪をけたてました。風がそれをけむりのやうに飛ばしました。

かんじきをはき毛皮を着た人が、村の方から急いでやつてきました。

子どもの父親が麓からやってくる……子どもの救助を予感させるところで物語は閉じられる……。

雪や氷は、人間（子供）の体温を容赦なく奪い、人間（子供）を死においやる。しかし一方、雪や氷は優れた断熱材でもあり、人間を凍死からまもるものともなる。北極のイヌイットは、氷の家を造り、その中で生活する。氷の家の中は、熱を遮断して内の熱を外へ逃がさないため家の中は、汗ばむほど温かい。我が国の、東北地方で冬、小正月、子供達は雪の「小屋」（かまくら）をこしらえ、来る人々に甘酒などを振る舞う行事がある。雪で囲った「かまくら」の中は温かい。

雪（氷）は、直に肌にふれると人間の体温を奪い、人間を死に至らしめる。しかし、他方、雪（氷）は人間をかばって、その命を守ることもある。冬山での遭難事故の教訓として、吹雪の中でいたずらにさまよつてはならない。体温を奪われて凍死してしまう。むしろ雪の「室」を作り、その中に閉じこもり救助をじっと待つ方がいい、と云う。残念ながら、人間（子供）は、自然（雪童子）の言葉（摂理）が分からぬために、自然の言葉に逆らい、自らを死に追いやる愚行を冒すこともある。

ところで、いかにも残酷に見える雪童子の振る舞いは、実は、子供の命を救いたいための慈悲の姿である。雪童子の言葉に逆らい、立ち上がって歩き出す子供の行為は、逆にみずからを死へ追いやるもの

である。この両者の矛盾を孕み揺れ動く姿を賢治は、それぞれ、「雪童子」「雪わらす」、「子供」「子ども」「こども」、という「表記の二相ゆらぎ」によって表現している（雪婆んごの表記は変わらない）。ちなみに、剣を持ち、火炎に包まれた不動明王は、じつは慈悲の仏なのだ（注・拙著『宮沢賢治「二相ゆらぎ」の世界』黎明書房、2009参照）。

自然（ここでは吹雪）は、人（子供）を死に追いやるものでもあるが、反面、人を死から救うものでもある。賢治は、このような自然の矛盾し相反する二面を〈順違二面〉と呼んだ。それだけではない、人間自身も〈順違二面〉的存在である。生きようとして立ち上がる子供の姿は、逆に、己を死に追いやる矛盾した行為でもある。この矛盾を孕む絶妙の摂理を、劇的に構想した童話がある。賢治、三十七歳で生涯を終える前年（1933）、『児童文学』に発表された「グスコンブドリの伝記」という中編の童話である。

「グスコンブドリの伝記」の世界観・人間観

実は、この童話のあとに「グスコブドリの伝記」という類似の童話が書かれ、多くの研究者の間では、こちらを決定稿として扱っているが、筆者は、いずれをも、それぞれに「自立」した作品として扱い、ここでは、本稿のテーマとの関係で、「グスコンブドリの伝記」をとり上げる。これは、核化学者で、原発反対の市民運動をたちあげてきた故高木仁三郎にも、「賢治の科学観というのが一番よく現れているのは『グスコブドリの伝記』よりも、その初期形となりました『グスコンブドリの伝記』のような気がします」と指摘されている（『宮沢賢治をめぐる冒険』社会思想社、1995）。

物語は、イーハトーヴの森の中で生まれ育った主人公グスコンブドリが、妹のネリと森の中でたのしく遊び暮らしている場面より始まる。ブドリが十二、ネリが九つになったとき〈どうしたわけですかその年はお日さまが春から夏に白くぼんやりして、いつもなら雪がとけるとすぐまつしろな鳩のやうな花をいっぱいにつけるマグノリヤという樹も蕾がちよつと膨れただけ、五月になつてもたびたび霰が降り、柿や栗の木も新しい芽を出してもしばらく黄いろですこしものびませんでした。〉〈北の方へたのまれて樹を伐りに行っている人が帰って来て、今年は北の海はまだ氷がいつもの五倍もあって、それがいまはじの方からとけてイーハトーヴの東の方へどンドン流れ出しているといふことを話しました。〉

東北、三陸地方特有の「寒さの夏」の到来である。〈去年撒いた麦もまるで短くて粒の入らない白い穂しかできず〉〈果物も花が咲いただけで小さな青い実が粒のまゝ落ちてしまう〉〈いちばん大切なオリザ（注・稲のこと）といふ穀物が一粒もできませんでした〉〈それでもどうにかその冬は過ぎて次の春になり畑には新しい種も播かれましたがその年もまたすっかり前の年の通りでした。そして秋になるともうほんたうの飢饉になってしまひました〉どうにかその年の冬をやり過ごしたが、春が来た頃にはブドリの父も母も〈ひどい病気のやうなやうすでした。ある日お父さんはじつと頭をかゝへていつまでもいつまでも考へてゐましたが俄に起きあがって「おれは森へ行つて何かさがして来るぞ」と云ひながらよろよろ家を出て行きましたが、まつくらになつても帰つてきませんでした。〉

この地方をたびたび襲う地震、噴火、干魃、冷害によって人々は塗炭の苦しみにあえぐ。ある年の飢

籠で、ブドリの父と母は、森へ出かけると「いつわり」わずかに残った食べ物を二人の子どもに残して、森に身を隠す……。孤児となった二人の上に痛ましい運命が襲う。妹のネリは人攫いに攫われ、ブドリは、森の中での養蚕の仕事や、田畑の仕事などで、冷害や干魃などを農民の一人として身を以て体験することになる。やがて、ブドリは、町へ出て、学校で、「フウフイーボー大博士」の講義を受けることになる。優秀な成績で卒業、大博士の紹介で火山管理局に勤めることになる。初めての日、火山局技師ペンネンネムがブドリに云う。〈ここの仕事といふものはそれはじつに責任のあるものなので半分はいつ噴火するかわからない火山の上で仕事するものなのです。それに火山の癖といふものはなかなかわかることではないのです〉。〈むしろそういふことになると鋭いそして濁らない感覚をもった人こそわかるのです〉。〈私はもう火山の仕事は四十年もして居りましてまあイーハトーヴ一番の火山学者とか何とか云はれて居りますがいつ爆発するかどつちへ爆発するかといふことになるとそんなにはきはき云へないのです（注・この事情は21世紀の今日でも変わらない）。そこでこれからの仕事はあなたは直観で私は学問と経験で、あなたは命をかけて、わたしは命を大事にして共にこのイーハトーヴのためにはたらくものです。〉ブドリは悦んではね上がります。

「あゝ私はいま火山の上に立つてゐたらそれがいつ爆発するかどつちへ爆発するかわかります。そしてそれがみんな役に立つといふなら何といふ愉快なことせう。どうかこれから教へて私を使つてください。どんなことでもしますから」。

ここには農芸化学者でもあった賢治の覚悟が、またあるべき態度が、示されていると言えよう。それ

から一ヶ月の間にブドリは、あらゆる機械の見方から、計算の仕様まで教わり、〈イーハトーヴぢゅうの三百幾つの火山とその動きはまるで掌の中にあるやうに解るように〉なる。

なかでも、圧巻は、噴火寸前の火山に〈手術〉する場面であろう。大自然の猛威である噴火を人力で防ぐことは不可能である。マグマの動きを科学的に追跡し、地層の薄弱なところを探り、そこに新しく建設された潮流発電所により得られた強力な電力を用いて、ボーリングする。火山の爆発を、サンムトリ市の方角からずらし、海の方へ誘導・噴出させる。自然（潮流）の力によって自然（火山）を制する。この見事な戦略によって、噴火そのものは防げずとも都市は救われる。

するとある日、老技師が、ブドリに言う。

「ブドリ君、あしたわれわれはこの海岸にあるサンムトリに行かなければなるまいよ」「はい今朝から俄に機械に働きだして居ります。」

「さうだ。どうも爆発が近いらしい。それももう二ヶ月ぐらゐのうちでないかと思ふんだ。これに大きなことをやられるところにあるサンムトリの市は全滅するしこの辺のはたけ全部だめになるのだ。今のうちに手術してガスを抜くか溶岩を出させるかしないと危ないと思ふんだ。（中略）この山のうちでいちばん弱いところはかえってサンムトリの市に寄つた方なんだ。今度爆発すれば多分山は三分の一サンムトリの側をはねとばして牛や卓子ぐらゐの岩は厚い灰や瓦斯といつしよにどしどしサンムトリ市に落ちてくる。そこで今のうちにこの海に向いた方のこのところにボーリングを入れて傷口をこしらえて置かねばならない。」

次の朝、火山局から工作隊を派遣し、〈火山の手術〉にとりかかる。それは勿論、決死の行為であった。ブドリたちの懸命な努力により、火山は、サンムトリの市ではなく海に向かって噴火し、市とその周辺は無事災害を免れたのであった。

一世紀も前に、賢治は、火山の噴出する溶岩を「誘導」することをフィクションの形ではあるが極めて具体的に描出している（ちなみに「サンムトリ火山」というのは、エーゲ海にあるギリシャの火山島サントリーニに由来する命名であろう）。賢治の「自然の力により自然を制する」というこの発想は、今日において、違った形ではあるが、火山対策の面に生かされている。その一例を挙げよう。1973年、アイスランドの南西部ヘイマエイ島のエルダフエル火山噴火の時、溶岩流が港町を襲う危険を避けるため、町の人々はポンプで一秒間一トンの割合で海水を汲みあげ放水を続け、溶岩の先端が冷え固まり、溶岩の流れを堰き止め、流れの方向をも変えた。まさに「自然の力で自然の力を制御した」ということであり、自然の力を「人間に順うもの」としたのであり、賢治はこの発想を一世紀も前に具体的に童話の形ではあるが「目にも物を見せてくれた」のであった。

やがて、ブドリは火山管理局の技師になる。管理局は、国に進言して、列島の沿岸に二百の潮汐発電所を建設、その巨大な電力によって、火山の噴煙を電氣的に処理し、田畑に必要な化学肥料を空から散布することになる。噴煙を有効利用するという、農芸化学者ならではの発想といえよう（周知の事実であるが賢治は、晩年、近隣の農民たちのために膨大な数の肥料設計書を書いている）。

ところで、この物語は、百年前のことであるから、原子力発電というものはない。しかし仮にあったとしても賢治は、（彼の思想から考えて）原発によって、この大事業の遂行を考えはしなかったであろう。作中に、〈潮汐発電〉という言葉の他に賢治独自の〈海力発電〉という語が出てくる。賢治は、潮汐発電だけでなく、海のあらゆる「力」を想定していたであろうことが窺われる。今日では、黒潮、親潮などの海流のエネルギーによってする海流発電をはじめ、寄せては返す波力による発電、また、海面と海底の温度差を利用した発電などの多様な発電が現実化している。四面海に囲まれた日本列島は、「海力」の宝庫である。それらのエネルギーを総称して「再生可能エネルギー」というが、自然のエネルギーは無限である。しかも国土が汚染されることはない。賢治は既に百年前に〈海力発電〉というアイデアを童話のかたちで「実現」していたといえよう。

文中、〈二百の潮汐発電〉とあることから、日本列島の全域に亘る潮汐発電所の建設で壮大な国家的規模における自然開発のプランであった。なお、〈火山の手術〉という言葉が出てきたが、ここには、地熱などの利用をも当然考えるであろう賢治の自然観がうかがわれる。原発をめぐる賛否の論が激しく飛び交っている今日、賢治が生きていたならば、どのような発言をするであろうか。

ところで、この物語は今を去る百年前に賢治によって発想され書かれたものである。その時代、世界的にみても、潮汐発電というものは存在しない（フランスのランス河口に、世界初の潮汐発電所がある。その建設企画が現実化したのは、ドゴール大統領のもとで国家事業として1966年運転開始した時点である。ランス河口をダムで堰き止め干満時の海面の高さの差を利用して二十四基のタービンで発電して

いる。多額の建設費も四十年で償却したという)。

物語の終末において、東北農村における「寒さの夏」のことが出てくる。オホーツク海の流氷が南下して東北三陸海岸は、異例の「寒さの夏」を迎え、物語冒頭にえがかれた飢饉の悲劇が繰り返されようとしている。この状況を救う手だては、ただ一つしかない。大博士が云う。

「きみはどうしてもあきらめることができないのか。それではここにたつた一つの道がある。それはあの火山島のカルボナードだ。あれは今まで度々炭酸瓦斯を吹いたやうだ。僕の計算ではあれはいま地球の上層の気流にすつかり炭酸瓦斯をまぜて地球ぜんたいの温度の放散を防ぎ地球の温度を七度温にする位の力をもつてゐる。もしあれを上層気流の強い日に爆発させるなら瓦斯はすぐ大循環の風にまじつて地球全体を包むだらう。けれどもそれはちやうど猫の首に鈴をつけに行く鼠のやうな相談だ。あれが爆発するときはもう遁げるひまも何もないのだ。」ブドリが云ひました。「私にそれをやらせて下さい。私はきつとやります。そして私はその大循環の風になるのです。あの青ぞらのごみになるのです。」

一世紀も前の当時は、今と違って、温暖化がむしろ望ましい状況であった。また、二酸化炭素が地球温暖化を引きおこすことは農芸化学者である賢治は知っていたのであろう。盛んに上昇気流のある気象条件の下では、噴煙(炭酸ガス)は成層圏にまで達し、北半球では、大循環の偏西風によって地球全体を包み、その「膜」で、地球から宇宙へ逃げる熱を遮断し、地球の温暖化が可能となる——と、いうシ

ナリオを賢治は考えていたのであろう(もつとも、最近の火山学の知見によれば、噴火により放出される炭酸瓦斯は、化石燃料を燃やして出る炭酸瓦斯に比べてたいした量ではないと言われる)。それよりも、噴煙の中の二酸化硫黄が大気中の水と反応し硫酸ミストとなり、それがエアロゾルとして、太陽光を吸収するので、逆に地表の温度低下を招き、『火山の冬』といわれる異常気象となる、とも言われている。今日の科学の見地よりすれば、賢治の提起している具体的な科学技術の方法には一部、疑問もあろう。しかし、「科学の真と文藝の真」(夏目漱石)とは次元が違う。「竹取物語」のかぐや姫は、現代においても、月の世界から来て、また帰って行くのであり、にもかかわらず、人の世の誠に違いはない。童話『グスコンブドリの伝記』の世界における、作者のユニークな発想(自然の力により自然を制御する)にまなび、そこから、火山列島に生きるわれわれの、未来像を描くべきであろう。なによりも、自然というものを〈順違二面〉としてとらえる自然観(人間観でもある)にこそ学ぶべきであろうと考える。

ところで、大博士の提示したそのプランを実現するためには、最後にどうしても一人は火山の現場に踏みとどまらざるを得ない。勿論、それは死を意味する。

ブドリは、自分からその「役」を願い出て、その最後の一人となった。かくて、地球の温暖化により、せまりくる冷害・飢饉から、イーハトーヴの多くの人々の命を救うことになる……。この物語は、次の一節によって閉じられる。

みんなはブドリのために喪章をつけて旗を軒ごとに立てました。そしてそれから三四日の後だん

だん暖かくなってきてたうたう普通の年になりました。ちやうどこのお話のはじまりのやうになる筈のたくさんのブドリやネリといつしよにその冬を明るい薪と暖かい食物で暮らすことができたのです。

注

(1)賢治は「毛布」「けつと」と表記を変化させている。

参考文献

西郷竹彦『宮沢賢治「二相ゆらぎ」の世界』黎明書房，2009。

西郷 竹彦（文芸教育研究協議会／文芸学）